

# 夜明け

キリストの臨在の使徒



# 『ドーンマガジン』

2026年8月号

## 目次

|                              |    |
|------------------------------|----|
| 特集記事 .....                   | 2  |
| 教会 — 全2回の第2回 .....           | 2  |
| 聖書研究 .....                   | 18 |
| イエスとトマス .....                | 18 |
| 最初のキリスト教殉教者 .....            | 21 |
| パウロが民に語る .....               | 24 |
| パウロがテモテを励ます .....            | 28 |
| 紫布の商人リディア .....              | 31 |
| 『クリスチャン・ライフ・アンド・ドクトリン』 ..... | 34 |
| 主からの啓示 .....                 | 34 |

聖書を手元に置いて読み進めましょう！

## 教会 — 全2回の第2回

「また、キリストは、からだ、すなわち教会の頭であり、すべてのものの先頭であり、死者の中から最初に生まれた方であり、すべてのものにおいて、キリストが第一となるためです。」

コロサイ人への手紙 1:18

先月号の『ドーンマガジン』誌に掲載された「教会」というテーマに関する考察の第1部では、「教会」という言葉の聖書的な意味、イエスの初臨後に教会がどのように成立したか、そして会員となるための要件について取り上げました。また、「キリストにバプテスマを受ける」とはどういうことか、水によるバプテスマの象徴、そして聖書に示されている教会の組織についても論じました。

今月号では、このテーマについてさらに考察を深めていきます。続くページで取り上げる重要なトピックには、十二使徒や教会の他の奉仕者たちの役割、教会の使命、そしてキリストを通して全人類を罪と死から救うという神の計画における天上の段階と地上の段階などが含まれます。

### 十二使徒

神の定めによれば、ペンテコステを起点として、教会全体は神によって任命された十二使徒によって仕えられることになっていました。（ヨハネの黙示録 21:10,14；エペソ人への手紙 2:19,20）これに従い、イエスは宣教活動中に自分と共に歩む十

二人の者を選び、彼らが イエスから直接の訓練と教えを受けられるようにしました。彼らは、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、フィリポ、バルトロマイ、トマス、マタイ、アルパオの息子ヤコブ、タダイ、シモン、そしてユダでした。マタイによる福音書 10:2-4

ご存知のように、ユダは不忠実であることが判明し、聖書によれば、パウロが主によって彼の後任として選ばれたことが示されている。使徒言行録 1:23-26には、残りの11人の使徒たちが、ユダの代わりとなる一人を選ぶための取り組みについて記されています。彼らはマティアスを選出しました。しかし、この決定は彼らが聖霊を受ける前に行われたものであり、主がその選択を認められたという証拠はありません。その後、マティアスの名は登場しません。

「使徒」（ギリシャ語：「アポストロス」）という言葉は、「遣わされた者」、すなわち福音の代表者や使節を意味します。この広い観点から見れば、すべてのクリスチャンは使徒です。なぜなら、私たちは皆「キリストの使節」だからです。（コリントの信徒への手紙二 5:20）実際、ギリシャ語の「アポストロス」という語は、聖書において、選ばれた十二使徒以外の個人を指して用いられています。（ヨハネによる福音書 13:16；フィリピの信徒への手紙 2:25）しかし、これは彼らが、主によって特別に選ばれた者たちに神の任命によって与えられたのと同じような、教会における高い権威の地位を占めていたことを意味するものではありません。

ヨハネによる福音書17:12で、イエスは神によって任命された十二人の使徒たちを、天の父がご自身に与えてくださった者たちとして言及しています。これらの特別な使徒たちは、互いにその地位を選んだわけではないため、ユダの代わりとしてマティアスを選ぶ権限はありませんでした。主が他の使徒たちを選ばれたのと同様に、復活後の主はご自身の時と方法に従ってパウロを選び、十二人の一人としての権威を彼に与えられたのです。

十二使徒は、単なる福音の宣教者以上の存在でした。彼らは聖霊によって奇跡的に導かれ、神の聖なる御言葉のメッセージを権威と正確さをもって語り、書き記すことができたのです。彼らの言葉は、かつてそうであったように、今もなお、すべてのクリスチャンに対する神からのメッセージです。彼らが教会の組織において占めるこの権威ある立場ゆえに、完成された教会は都に例えられているのです。この象徴的な都には十二の礎石があり、それらの石には「小羊の十二使徒」の名前が刻まれていると示されています。ヨハネの黙示録21:14

## その他の奉仕者たち

エペソ人への手紙4章11節で、使徒パウロは、主が教会に他の奉仕者たちを備えてくださったことを教えています。使徒たちに加え、主は預言者、伝道者、牧者、教師を備えられました。ペテロは、旧約聖書の著者たちを神の「聖なる預言者たち」と呼んでいます。（ペテロの手紙第二 3:2）彼らは「聖霊に導かれて」書いたので、クリスチャンは、使徒たちの言葉と同様に、彼らの言葉も権威あ

るものとして受け入れるべきです。ペテロの手紙  
第二 1:21

しかし、パウロが預言者を教会の奉仕者として語る際、彼はこの用語をはるかに広い意味で用いており、福音を公に説く者たちを指しています。（コリントの信徒への手紙一 12:28；エフェソの信徒への手紙 4:11；使徒言行録 11:27,28；使徒言行録 15:32；使徒言行録 21:10,11）これらの預言者、伝道者、牧者、教師は皆、教会において不可欠な奉仕者ですが、十二使徒のように靈感を受けたわけではなく、また使徒たちと同じような奇跡的な方法で任命されたわけでもありません。

新約聖書における「各教会で長老たちを任命した」という表現は、ギリシャ語の原文「**ἐπίσκοπος**」によれば、投票のように「手を挙げる」ことをより適切に指しています。（使徒言行録 14:23）ここから明らかに示唆されるのは、長老や執事といった教会の下位の奉仕者たちは、彼らが仕えるべき会衆の投票によって選出されるべきであったということです。

上記の聖句にも見られる「長老」という聖書用語は、一般的に、霊的な面から教会に仕える男性を指します。牧師、教師、伝道者、あるいは公の場で聖書を解説する預言者などは、いずれも「長老」という総称に含まれます。使徒言行録14章23節で翻訳されているギリシャ語の「**presbuteros**」は、「成熟した者」を意味します。教会においては、信仰が堅固であり、霊的な経験において成熟していると認められている者を指します。

「監督 (bishop)」という言葉も新約聖書で使用されており、教会によって選出された男性の奉仕者に適用されます。この言葉の原語であるギリシャ語「エписコポス (episkopos)」は、「監督者」または「見張り人」を意味します。すべての長老は、機会と能力に応じて、本来、教会における監督者である。神の群れを見守り、特に霊的な面においてその必要に配慮することは、彼らの義務である。テモテへの手紙第一 3:1,2 ; テトスへの手紙 1:7

「執事 (deacon)」という言葉も、初代教会の組織に関連して数回登場します。これはギリシャ語の「ディアコノス (diakonos)」の訳語であり、「用事をこなす」あるいは「世話をする」という意味です。聖書によれば、執事は「評判が良く、聖霊と知恵に満ちた者」であり、教会の物質的な運営を助けるために任命されたとされています。最初に任命された執事は、エルサレムの教会にいました。使徒言行録6:2-4 ; テモテへの手紙第一 3:8-13

会衆によって長老（監督）や執事として適切に選出される者の聖書的な資格は、パウロによってテモテへの手紙第一3章1～13節に示されています。これらの資格において、「教えるのにふさわしい」という表現は、聖書に教えられている神の計画の真理を正しく理解していることを意味します。これらの資格を満たす兄弟たちがいる奉献された信徒の集まりは、その規模の大小にかかわらず、聖書によって、彼らをこれらの奉仕に選出する権

限を与えられています。そうして行われた任命は、主によって認められます。

聖書は、どのクリスチャンの集まりも、奉仕者を選出したり、集会を開いたり、主の働きを遂行したりするための権限を、親教会に求める必要はないことを明らかにしています。同様に、会衆がこうした自由を行使するために、大規模である必要もありません。聖書の記録によれば、使徒時代の多くの教会、すなわちクリスチャンの集まりは、信者たちの家庭で組織され、その家庭で定期的な集会を開いていました。（ローマ人への手紙16:5；コリントの信徒への手紙第一 16:19；コロサイの信徒への手紙 4:15）今日でも同じことが行われています。昔も今も、主は、グループとして――あるいは聖書的な意味での「教会」として――協力し合える仲間を見つけた人々を豊かに祝福してください。彼らは、単に手を挙げるという簡単な方法で、自分たちの奉仕者を選出することができます。会員名簿は必要なく、聖書によってそのようなものが認められているわけでもありません。

初期教会における様々なグループが開催した集会の性質について、聖書にはあまり具体的な記述がありません。確かに、使徒たちや他の人々は、時折説教を行いました。しかし、説教を行う資格のある人がいなくても、有益な集会は開催できます。聖書の研究のための集会（主題別であれ文脈別であれ）、そこで出席者全員が自分の考えを述べたり質問したりする機会があるような集会は、非常に有益です。長老が選出されている場合は、その長老が学び会が秩序正しく行われるよう奉仕す



べきです。祈り、賛美、そして証しの集いも、神の御心を知り、それを行うことに真剣に取り組んでいる人々にとって、靈的に有益なものです。

## 教会の使命

教会の現在の使命は三つあります。第一に、将来の奉仕の働きに向けて聖徒たちを完全に備えさせることです。（エペソ4:12,13）第二に、各会員の中に、キリスト者としての品性の実と恵みを育むことです。（ガラテヤ5:22,23；ペテロ第二1:5-8）第三に、今や目前に迫っているキリストの祝福の王国について、世に対して神の証人となることです。マタイによる福音書24:14

この主題に関する考察の第1部で、私たちはイエスがペテロに語られた次の言葉に注目しました。「この岩の上に、わたしの教会を建てよう。」（マタイによる福音書16:18）時が来れば、「建てられる」ものは完成に至ります。教会の「建設」が永遠に続くことは、神の御心ではありません。したがって、キリストを通して救いを得るすべての者が教会の構成員になるというわけではありません。「教会」という言葉[ギリシャ語：「エクレシア」]の本来の意味は「呼び出された者たち」であり、これは現在の神の御旨という概念とは相反するものです。教会は、この世から「呼び出されている」のです。（コリントの信徒への手紙一 1:26；ペトロの手紙一 2:9）その数は「わずか」であり、「小さな群れ」となるでしょう。（マタイによる福音書7:13,14；マタイ22:14；ルカによる福音書12:32）約束された神の王国が来るまでは、世界全

体を改宗させることは神の計画ではありません。

## マタイ6:10

「あなたはキリスト、生ける神の御子です」とペテロは証ししました。（マタイによる福音書**16:16**）この言葉は、イエスを旧約聖書のメシアに関する約束と同一視するものであり、ペテロが、それらの約束を成就するために神が遣わされた方として、イエスを正しく認識していたことを示しています。教会を通しての神の御計画全体を明確に理解するためには、キリストに関する旧約聖書の約束を心に留めておくことが不可欠である。なぜなら、教会は、それらの約束の成就においてキリストと結びつくために、この世から召し出されたからである。神はアブラハムに、「あなたの子孫によって、地上のすべての国民は祝福を受ける」と言われた。（創世記**22:18**）ガラテヤ人への手紙**3章16節**で、パウロはこの約束の「子孫」がキリストであることを教えています。使徒は、この約束の子孫についてさらに詳しい情報を与えています。ガラテヤ人への手紙**3章27節**と**29節**には、次のように記されています。「キリストにあってバプテスマを受けたあなたがたは、みなキリストを身に着けたのです。……もしあなたがたがキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人である。」ここには、神の御心を行うために完全に献身し、キリストの体である教会の成員となり、死に至るまで忠実である者たちが、すべての人が祝福されることになる約束の「子孫」の一部となるという、紛れもない証拠がある。ヨハネの黙示録**2:10**

教会の設立は、人類に対する神の御計画の完成ではありません。それは、人類を祝福するという神の計画の始まりにすぎないのです。ヤコブの手紙1章18節では、教会は神の被造物の「ある種の初穂」であると述べられています。この表現はヨハネの黙示録14章4節でも用いられており、神の御国の天的な側面である象徴的なシオンの山において、「小羊」であるキリスト・イエスと共に天に結ばれている者たちに当てはめられています。ヨハネの黙示録14章1節；ヘブライ人への手紙12章22、23節

コリントの信徒への手紙第一第15章で、パウロは、教会と世の双方にとってのいのちの希望が、死者の復活にかかっていることを極めて明確に指摘しました。もし死者の復活がないならば、と彼は論じました、「キリストにあって眠りについた者たちも滅びてしまったことになる」。（コリントの信徒への手紙第一 15:18）しかし、彼は復活の確証と、すべての人が永遠の命を得る機会を私たちに与え、「アダムにおいてすべての人が死ぬように、キリストにおいてすべての人が生かされる」と語った。コリントの信徒への手紙第一 15:22

そしてパウロは、復活には明確な順序、すなわち段階があることを示しています。「人はそれぞれ自分の順序に従って復活する。キリストが初穂であり、次に、キリストの来臨の際、キリストに属する者たちが復活する。」（コリントの信徒への手紙一 15:23）ここで言及されている「初穂」とは、教会を指します。これに続いて、ギリシャ語の原文をより適切に訳すと、「その後、キリストの

臨在の間にキリストのものとなる者たち〔教会に属さないすべての人々が、それぞれの順序に従って〕」となります。この節の「来臨」という言葉は、ギリシャ語の「パルーシア（Parousia）」から訳されたもので、「臨在」を意味します。これは、キリストとその教会が、罪と死を滅ぼし、全人類に、キリストの流された血によってもたらされたいのちの賜物を受け入れる機会を与えるために統治する、キリストの千年の王国を指しています。

その直後に続くパウロの記述は明確です。「それから終わりが来ます。キリストが王国を父なる神に引き渡し、あらゆる支配、権威、力を打ち砕かれた時です。キリストは、すべての敵を御足の下に置かれるまで、統治し続けなければならないからです。最後に滅ぼされる敵は、死です。」（コリントの信徒への手紙一 15:24-26）これこそが、キリストと教会を通して成し遂げられる、神の偉大かつ究極の目的である――すなわち、教会の建設が完了した時に、全人類に及ぶ「その後」のな祝福である。

## 天と地

パウロは復活に関する教えの中で、ある者は天の体を受け、ある者は人間の体、すなわち地上の体を受けると明らかにしています。それぞれのケースにおける決定的な要因は、蒔かれる「種」あるいは「むき出しの穀粒」の種類です。（コリントの信徒への手紙一 15:37,38）パウロが言及する「それ」あるいは「むき出しの穀粒」とは、単にそ

の人のアイデンティティ、つまり生涯にわたる思考や人格の総体です。

神の御心を行うために完全に奉獻され、犠牲的な死によってキリストと共に葬られた人々は、復活の際に「天の」体、すなわち天の体を与えられる。(1コリント15:40) これは、彼らが現在の地上の生涯の残りの年月を通じて、「新しいいのち」のうちに歩むかどうかにかかっている。(ローマ人への手紙 6:4) この地上の巡礼の旅の間に、彼らは「上のことに心を向ける」ことを学びます。彼らの希望は天にあり、信仰によって、彼らは象徴的にキリストと共に「天の所」に住んでいるのです。(コロサイ人への手紙 3:2 ; エペソ人への手紙 1:3) このように、彼らはまだ肉体にありながら、霊的な品性を「蒔く」のです。復活の際、これらは天の報いを受けます。

しかし、大多数の人々は霊的な事柄に関心を持ちません。これは、彼らが必ずしも邪悪であるという意味ではありません。彼らのほとんどはそうではありません。彼らは人間として、地上の存在として創造されたため、この世の良きものを愛しており、神は彼らが天上の事柄を志さないからといって、彼らを非難されることはありません。死において、彼らが地上の品性を「蒔く」のは物事の本質そのものであり、その結果、人間として、「地上の体」をもって死者の中からよみがえることになるのです。1コリント15:40

のちに『ヨハネの黙示録』20章6節で「最初の復活」と記述される教会の復活について、パウロは次のように説明しています。「朽ちるものとして蒔

かれ、朽ちないものとしてよみがえる。辱めとして蒔かれ、栄光としてよみがえる。弱さとして蒔かれ、力としてよみがえる。自然の体として蒔かれ、霊の体としてよみがえる。」 コリントの信徒への手紙一 15:42-44

これに対し、パウロは次のように付け加えています。「自然の体があり、また霊の体がある。」（コリントの信徒への手紙一 15:44）言い換えれば、パウロは、「最初の復活」に参加する者たちが経験する本質の変化を説明するにあたり、死からよみがえるのは彼らだけであるという意味ではないことを理解してほしいと願っているのです。なぜなら、全人類は死から救い出されることになっていますが、彼らは自然の、地上の、人間の体を受け取るだけだからです。

パウロは教えを続け、次のように述べています。「最初の人 は地から出た者、土の者です。第二の人 は天からの主です。土の者 [人間の希望や欲望を抱いて死ぬ者] がどのようなものであるか、土の者 [復活において] もまたその通りであり、天の者 [今、天の事柄に心を向けている者] がどのようなものであるか、天の者 [復活において] もまたその通りです。」 コリントの信徒への手紙一 15:47,48

パウロは、復活に関するこの教えを次のように締めくくりました。「この朽ちるべきものは、朽ちないものをまとい、この死ぬべきものは、不死をまとうのです。こうして、この朽ちるべきものが朽ちないものをまとい、この死ぬべきものが不死をまとうとき、『死は勝利に飲み込まれる』と書

かれている言葉が成就するのです。『死よ、お前の 刺はどこにあるのか？ 墓よ、あなたの勝利はどこにあるのか？』と。コリントの信徒への手紙一 **15:53-55**

このように、パウロはわずか数語で、教会の希望と世の希望の両方を提示している。教会の復活の希望とは、「栄光と誉れと不死」である。（ローマ人への手紙 **2:7**）生まれながらにして不死を備えている人間は一人もいない。それは、死に至るまでキリストの足跡を忠実にたどる者たちに与えられる報いである。ヨハネの黙示録 **2:10**には、「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える」と記されている。

最初の復活においてこの栄光に満ちた希望が実現するための、彼らへの召しと備えは、ペンテコステ以来のこの時代において、聖霊を通じた神の御業であった。しかしパウロは、これが成し遂げられ、キリストの教会、すなわち「からだ」の最後の者が栄光に入ったとき、死の滅びに関する旧約聖書のそれらの栄光に満ちた約束が成就する時が来ると説明している。「死よ、お前の刺はどこにあるのか？ 墓よ、お前の勝利はどこにあるのか？」 **1コリント15:55**；イザヤ書**25:8**；ホセア**13:14**

パウロは、イザヤ書とホセア書を引用して、人間の大きな敵である「死」と「墓」を滅ぼすという神の御計画を私たちに確約しています。ホセア書 **13章14節**で使われている「墓」という言葉は、ヘブライ語の「シェオル」の翻訳であり、新約聖書のギリシャ語「ハデス」に相当します。これらの

言葉は、箇所によって「墓」とも「地獄」とも訳されていますが、それらが示す意味、特に「墓」という言葉は、単に死の状態、すなわち忘却の状態を指すものであり、文字通りの苦しみを受ける場所を指すものではありません。（伝道の書9:10；詩編115:17；使徒言行録 2:31）したがって、イエスが「地獄の門」——すなわち墓、死——が教会に打ち勝つことはないと言われたとき、イエスが指し示された人類に対する神の御心を、私たちはこのように理解するのです。マタイによる福音書16:18

なんと素晴らしい確信でしょう！罪と死が支配する間、地獄——すなわち墓——は犠牲者を奪い続けてきましたが、ヨハネの黙示録1:18において、イエスのご自身が地獄の「鍵」をお持ちであると告げておられます。イエスは、人類の贖い主としてご自身の死によって、この鍵、すなわち地獄の門を開く権利を買い取られたのです。イエスの教会が完全に築き上げられたとき、教会はイエスと共に、全人類に約束されたいのちの祝福を受けることになるでしょう。

その間、何百万人もの人々が死、すなわち聖書に記された地獄へと向かい続けているという事実があっても、彼らからこれらの祝福が奪われることはありません。地獄の門はキリストに打ち勝つことはできませんでした。それは、キリストの教会に対しても、残りの世界に対しても、そしてアダムとアダム以来死んだすべての人々に対しても、打ち勝つことはできないでしょう。神の力によって、これらの門は大きく開かれ、死の囚人たちは



すべて解放されるのです！ イザヤ書 42:7；イザヤ書 49:9；イザヤ書 61:1；ルカによる福音書 4:18

これこそが、教会の将来の働きとなるのです。なんと栄光に満ちた働きでしょう！今、主に忠実であることを証明する上で、これほど大きな励みとなるものはないはずです。天の父と一つとなり、主に完全に献身して生きることによって由来する平安と喜び以上に、人が経験しうるものはありません。確かに試練はありますが、パウロが私たちに思い出させてくれるように、主が約束してくださった「永遠の栄光の重み」に比べれば、それらは実際には「軽い苦難」であり、「ほんの一瞬」しか続かないものです。コリントの信徒への手紙二

4:17,18

今この時代に、「召し出された者たち」、すなわち教会の一員と数えられることは、祝福に満ちた特権です。神は確かに御自分の民を祝福しておられます。とりわけ、救いの計画の美しさを彼らに明らかにしてくださっているのです。キリストとその教会を通して、全世界が、主が彼らのために用意された祝福——ペテロが「世の初めから、神がすべての聖なる預言者たちの口を通して語ってこられた」と述べた「回復の祝福」——に喜びを見出す機会を得られることを、私たちはどれほど感謝していることでしょうか。使徒言行録3:21

教会と世界の双方に対する、調和に満ちた愛に満ちた神の救いの計画を鑑みれば——その美しさの一部はすでに御言葉を通して私たちに明らかにされている——私たちは、偉大なる使徒パウロが次のように記した時の心情をよく理解し、その言葉

に共感することができる。「ああ、神の富と知恵と知識は、なんと偉大なことか！ 神の御決定や御業を理解することなど、私たちには到底できません。だれが主の御心を知ることができるでしょうか。だれが主を助言できるほど十分に知っているのでしょうか。また、だれが主に何かを与えたというのでしょうか。すべては主から出て、主の力によって存在し、主の栄光のためにあるのです。主を永遠に賛美します。アーメン。」ローマ人への手紙 11:33-36

8月2日のレッスン

## イエスとトマス

**鍵となる聖句：**「それから、イエスはトマスに言われた。『ここに指を当てなさい。私の手を見なさい。手を伸ばして、私の脇腹に当てなさい。疑うのをやめて、信じなさい。』  
ヨハネによる福音書 20:27

**選読箇所：**  
ヨハネによる福音書 20:24-29

使徒トマスは、しばしば「疑い深いトマス」と呼ばれます。しかし、今日の聖書箇所は、霊的な成長の過程にある一人の弟子を描いています。トマスは、イエスが他の弟子たちの前に初めて現れた時、その場にいませんでした（ヨハネによる福音書20:24）。他の弟子たちが「私たちは主を見た」と証ししたとき、トマスは兄弟たちの話を信じる前に、証拠を求めたのです。（ヨハネによる福音書20:25）彼は、釘の跡を自分の目で確かめ、傷跡に手を触れたいと願った。それは冷酷に聞こえるかもしれないが、それは人間らしい反応でもある。悲しみの後、人は新たな希望に惑わされることを恐れることがよくある。トマスは、イエスが復活したという言葉を目撃的に受け入れるつもりはなかった。彼は、他の弟子たちが経験したのと同じように、自ら直接体験したかったのだ。ヨハネ 20:19,20

8日後、弟子たちは再び戸を閉めて部屋にいた。（ヨハネによる福音書20:26）イエスの復活によって、彼らの恐れが一瞬にして消え去ったわけではなかった。それでも、イエスはやって来て、「平安あれ」と言われた。師であるイエスからのこの優しい言葉は、ヨハネ、ペテロ、パウロによる新約聖書の書簡において、初期教会への として、一般的な挨拶となるのである。トマスに話しかける前に、イエスは部屋中の不安を和らげながら、貴重な教訓を授けた。 信仰とは、恐れていないふりをするものではありません。それは、私たちの心の扉をくぐり入ってくる、復活されたキリストを信頼することです。

その後、イエスはトマスの方を向き、私たちの「鍵となる聖句」の言葉を再び述べられました。「ここに指を当てなさい、……手を伸ばしなさい」と。これは、トマス自身が信じるための条件として挙げていた言葉に呼応するものでした。（ヨハネによる福音書20:27）イエスが復活されたことを当初疑ったのは、トマスだけではありませんでした。イエスの復活の日、弟子たちは皆、疑いを持っていました。彼らは女性たちの報告を信じようとしなかったのです。ルカによる福音書24:11

ルカによる福音書には、さらに次のような記述がある。「イエスご自身が彼らの真ん中に立たれ、彼らに言われた。『平安あれ。』しかし、彼らは恐怖と驚きに襲われ、幽霊を見たのだと思った。そこでイエスは彼らに言われた。『なぜ動揺しているのか。なぜ心に疑いが生じるのか。私の手と足を見なさい。私だ。触れて確かめなさい。幽霊

には、あなたがたが見ているような肉や骨はないからだ。』　こうして言われた後、イエスは彼らに御自分の手と足をお見せになった。それでも、弟子たちは信じられずにその場に立ち尽くし、喜びと驚きに満たされていた。そこでイエスは彼らに尋ねられた。「ここに何か食べるものはあるか。」　ルカによる福音書 24:36-41

イエスがすべての弟子たち、そして私たちに伝えたメッセージは、トマスに与えたものと同じです。「疑う者ではなく、信じる者になりなさい。」（ヨハネによる福音書20:27）疑いは混乱や苦痛をもたらすこともあります。ここでの問題は忠誠心でした。トマスはイエスに身を委ねるのか、それとも引き続き距離を置くのか。信仰とは疑問がないことではなく、答えを求めつつ、自分の人生をイエスの御手に委ねることです。

トマスは躊躇することなく、復活されたイエスに対して、「私の主、私の神」（ヨハネによる福音書20:28）という、最高潮に達した告白で応えました。ここでトマスは、イエスの復活を認めただけでなく、その師を「主」として認めたのです。イエスは、それ以来のあらゆる世代に向けて、次のような深遠な言葉でこの箇所を締めくくっています。「見ないで信じる者は幸いである。」（ヨハネによる福音書20:29）私たちは、イエスの傷跡に実際に触れることは決してできません。しかし、使徒たちの証し、聖霊の働き、そして復活された主がキリストの体を築き上げられる御業に対して、信仰と信頼を働かせましょう。

## 最初のキリスト教殉教者

**鍵となる聖句：**「ステパノは、信仰と力に満ちて、民の間で大きな不思議と奇跡を行っていた。」

**使徒言行録 6:8**

**関連聖句：**

**使徒言行録 6:7-10; 7:1-60**

ステパノの殉教は、初代教会が急速に成長した時期を経て、ペンテコステの直後に起こったものと見られる。その平和と成長の季節は、まもなく訪れる試練に備えて信者たちを準備させた。ステパノの死は、教会に対する迫害の始まりを告げるものであり、キリストの弟子たちが死に至るまで忠実であり続けるよう求められていることを示した。ヨハネの黙示録2:10

もともと会衆の実務的な必要を助けるために選ばれたステパノは、並外れた霊的な強さと才能を持つ人物であることが証明された。彼は「信仰と聖霊に満ちていた」（使徒言行録 6:5）と記されている。主に対する彼の信仰、愛、そして熱意は、彼を真理の力強い証人とした。彼の知恵と聖なる霊は極めて際立っていたため、敵対者たちは彼に対して有効な反論をすることができなかった。使徒言行録 6:10

ステパノの論理に打ち勝つことができなかった敵たちは、虚偽かつ歪曲された証言を用いて、彼を

サンヘドリンの前に引き出した。死に至る可能性のある告発に直面しながらも、ステパノは恐れを見せることはなかった。むしろ、彼の顔には平静さと清らかさ、そして神に対する 確信が表れていた。使徒言行録**6:15**によれば、評議会に席を置いていた者たちは皆、「彼の顔がまるで天使の顔であるかのように見えた」と述べている。

使徒言行録**7章2節**から**53節**に記録されている、ステパノのサンヘドリンでの演説は、勇気とイスラエルの歴史に対する深い知識の両方を示していた。その締めくくりの言葉において、彼は聴衆に対し、神に逆らい、イエスを拒絶した責任を負っていることをはっきりと告発した。（使徒言行録**7:51-53**）彼らは悔い改めるところか、激怒した。ステパノは彼らの怒りが高まる中でも動じなかった。彼は天の栄光の幻を与えられ、イエスが神の右の座に立っておられるのを見たと言った。この発言により、告発者たちは裁判を打ち切り、彼を石打ちの刑に処した。タルソのサウロもその場に居合わせ、この行為に賛同した。使徒言行録**7:54-60**

ステパノは息を引き取る際、自分自身のためだけでなく、自分を殺そうとしている者たちのためにも祈り、彼らの罪が彼らに帰せられないよう願った。この点において、彼はキリストの御霊を体現していた。**60節**では、彼の死を「眠り」と表現している。間違いなく、ステパノは復活を信じており、やがて死の「眠り」から目覚めることを確信していたのである。「先祖たちと共に眠った」と

いう表現は、旧約聖書に**40**回近く登場し、死の眠りを指しています。

サタンに苦しめられていたヨブは、復活の朝が来るまで死の眠りの中で安らぎを得たいと願い、「どうか、私を墓の中に隠してください！ あなたの怒りが過ぎ去るまで、私を覆ってほしい！ 墓で過ごす期間を決めて、それから私を再び引き上げてほしい！」（ヨブ記**14:13**）と、死の眠りによる安らぎを願った。イエスはヨブのこの言葉を裏付け、「墓にいる者たちは皆、その方〔人の子〕の声を聞いて、出て来る」と語られた。（ヨハネによる福音書**5:28,29**）

ステパノの忠実な証しは、後の信者たちにとっての模範となりました。迫害の形は変わっても、キリストのために忠実に苦難に耐えるという召命は変わりません。ステパノは、ペンテコステ以降、聖書に記録されているキリスト教時代の最初の「克服者」であり、「最初の復活」に与るにふさわしいと認められた人物でした。（ヨハネの黙示録**20:6**）彼の生涯と死が、私たちが恵みをもって語り、勇気をもって立ち、主から目を離さないよう励ましてくれることを願います。



## パウロが民に語る

主要聖句：「そして彼は言った、『私たちの先祖の神は、あなたがたを選び、神の御心を知り、その義なる方を見、その口から出る声を聞くようにされたのです。あなたがたは、自分が見聞きしたことを、すべての人々の前で、神の証人となるのです。』」

使徒言行録 22:14,15

選読箇所：

使徒言行録 22:1-21

今日の学びでは、使徒パウロがエルサレムのユダヤ人同胞たちの前で、ダマスコへの道でキリストに回心した体験を語る様子を聞きます。タルソのサウロ（後にパウロと改名）を神が選ばれたことは、当時、主の弟子たちを困惑させました。初期教会の指導者たちとサウロの間には、公然とした敵意がありました。彼らはサウロを、キリスト教徒を迫害する者としてしか知らなかったからです。彼らは、サウロの出生地、教育、そして生い立ちが、異邦人への特別な使命を果たすための準備となっていたことを理解していませんでした。彼はローマ市民であり、教養があり、深く敬虔で、パリサイ人の家系に生まれました。彼は律法と、イスラエルに対する神の約束に対して熱心でした。（使徒言行録 26:2-5；フィリピの信徒への手紙 3:4-6）初期の教会が当然のことながら彼を悪人と

見なしていたのとは異なり、彼は悪人ではなく、その行動においては誠実で敬虔な人物であった。キリスト教徒がモーセの律法に反対していると信じていたサウロは、良心に従って彼らを迫害していたのである。

パウロは誠実ではあったが靈的に盲目であったため、主は彼が進路を変えることができるよう、彼を立ち止まらせた。彼の熱意は、教会を迫害することから、キリストとその信徒たちに仕えることへと向け直された。これは墮落した人間の転向ではなく、誠実な人物への導きであった。神は今や、彼をユダヤ人と異邦人の双方に福音のメッセージを宣べ伝えるのに理想的な人物として任命しようとしていた。

神は誰にも信仰を強要されることはなく、誠実な心にのみ御自身の真理を開かれます。サウロの判断は誤っていましたが、その意図は正しかったため、主は彼の目を開かれました。パウロが語ったところによると、ダマスコへの道中で、天からのまばゆい光が彼を包み込み、彼は目を失って倒れました。すると、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声が聞こえました。誰が話しているのかと尋ねると、「わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである」という答えが返ってきました（使徒言行録 22:6-8）。これは、キリストがご自分の民とどれほど密接に一体となっているかを示しています。彼らを迫害することは、キリストご自身を迫害することなのです。その真理こそが、キリストの体であるすべての

兄弟姉妹に対する私たちの振る舞いを導くべきものです。

サウロはすぐに、「主よ、私はどうすればよいのですか」と尋ねました。（使徒言行録 22:10）これは、彼の意志を完全に委ねたことでした。キリストに関する真理を理解した瞬間、彼はキリストに自分の命を捧げる覚悟ができたのです。今日の信者たちも、同じ反応を示すべきです。かつては誤りに目がくらんでいたが、それでも誠実な人々は、感謝と熱意、そして奉仕の生活をもって真理に応えるべきです。

主はサウロをダマスカスへ遣わされました。そこで、尊敬され、敬虔な弟子であるアナニアは、この新しく改宗した者が、異邦人や王たち、そしてイスラエルの民の前にキリストの御名を宣べ伝えるために、またその召しのために苦難を受けるために特別に選ばれたことを知りました。サウロはキリストの完全な神の栄光を目撃したわけではありませんでしたが、イエスが復活し、栄光に包まれたことを 確信をもって知るには十分なものを目撃したのです。（使徒言行録 22:11-13）アナニアは、今日の「鍵となる聖句」の言葉をサウロに語りかけ、彼を「すべての人への証人」として福音のメッセージを宣べ伝える使命へと導いた人物でした。

パウロは、自分が見聞きしたことに忠実な証人でした。私たちも同様であるべきです。他者に忠実に真理を分かち合うためには、まず自分自身がその真理を理解しなければなりません。パウロのよ

うに、福音のメッセージを証しするにあたり、神の御心を信頼しましょう。

## パウロがテモテを励ます

**鍵となる聖句：**「それゆえ、私はあなたに、私の  
按手によってあなたの中に与えられた神の賜物を  
、再び燃え立たせるよう、思い出させておきます  
。」

テモテへの手紙第二 1:6

**関連聖句：**

テモテへの手紙第二 1:1-14; 3:14,15

使徒パウロには実の子供はいなかったようですが、テモテを「信仰におけるわが子」と呼んで優しく語りかけたことから、その深い愛情がうかがえます。（テモテへの手紙第一 1:2）彼はすべての信者を自分の霊的な子供として見ていましたが、その思いは、長い間忠実に彼の傍らで仕えてきたテモテに対して特に強いものでした。

今日の聖句にあるパウロの言葉は、すべてのクリスチャン、とりわけ真理においてまだ若い人々への確かな助言です。それらは、自分の人生を主とその奉仕に奉献し、自分の才能や機会に応じて主の奉仕者や僕として役に立ちたいと願っている人々にとって、さらに大きな影響力を持ちます。

これらの言葉は、パウロがローマで囚人となり、死を目前に控えていた頃に、テモテに向けて送られたものです。テモテはもはや子供ではなく、おそらく四十歳前後で、長年にわたり使徒と共に労

苦を重ねてきました。この手紙が書かれた当時、テモテはエフェソの教会に仕えており、そこで彼の名を冠した書簡を受け取っていました。

パウロは、ティモテオに自分の使徒としての立場を思い出させることから自己紹介を始めます。彼はダマスコへの道中で、主の栄光に満ちた御姿を垣間見ることが許され、主の復活の証人となりました。その後、パウロは、キリスト・イエスにあって与えられる神のいのちの約束の内容を宣べ伝える使命を授けられました。（使徒言行録 9:3-20、22:14,15）

パウロは、神の前での清い良心、テモテへの絶え間ない祈り、そしてエフェソでの別れの後、再び彼に会いたいという願いについて触れています。

（テモテへの手紙第二 1:3,4）目立つ立場に伴う危険を承知していたパウロは、テモテに対し、謙遜であり続け、忠実であり、聖書に根ざした生活を送るよう励ましました。（テモテへの手紙第二 1:13）彼は、神が御言葉を通して与えてくださる力にしっかりと立ち続ける必要がありました。

またパウロは、ティモテオが母と祖母から受け継いだ誠実な信仰と敬虔さを思い起こさせ、この受け継いだものが彼の心に堅固な土台を築いたことを確信させました。（テモテへの手紙第二 1:5）他の聖書の箇所も、敬虔な親が子供たちに人格の土台を築き、その上に有益な人生が築かれることを強調しています。申命記 6:6,7；箴言 22:6；エペソ人への手紙 6:4

使徒はテモテに対し、自分の中にある「神の賜物を燃え立たせる」こと——すなわち、新たな活力をもってそれを再燃させることを勧めました。また、恐れに屈してはならないとテモテに警告し、神の御霊は恐れではなく、「力と愛と健全な心」であると彼に思い出させました。（テモテへの手紙第二 1:6,7）そのような霊は、勇氣、神とその民への愛に満ちた献身、そして熱意を注ぐ上での賢明な判断力を生み出します。パウロの願いは、神のすべての子供たちがこの霊をますます深め、主の奉仕において、恐れを知らず、かつ賢明に自分の才能を用いるようになることでした。

テモテへの手紙第二3章14、15節で、使徒はテモテに対し、彼が神から教えを受けてきたこと、そしてその教えが旧約聖書の「聖書」と、イエスおよび靈感を受けた使徒たちの言葉を通じて彼に伝えられたことを思い出させました。テモテがパウロによって励まされたように、私たちもまた、この愛すべき使徒の言葉によって力づけられましょ

う。

## 紫布の商人リディア

鍵となる聖句：「また、テアティアラの町に住む、神を敬う紫布の商人リディアという女が、私たちの話を聞いた。主は彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの語ることに耳を傾け、それを受け入れた。」

使徒言行録 16:14

選読箇所：

使徒言行録 16:11-15,40

今日の学びは、ヨーロッパへの福音伝播に関するものです。パウロは最初の伝道旅行の後、シラスと知り合いました。パウロは、シラスを伴ってシリア、キリキア、デルベ、リストラを巡る第二の伝道旅行に出る時が来たと判断しました。これらの地で、彼らは使徒の最初の伝道旅行を通じてすでに主を受け入れていた人々の信仰を強めました。使徒言行録 15:40,41；使徒言行録 16:1,4

この時点までの宣教活動が順調に進んだ後、パウロは小アジアを北と東へと旅するつもりでした。しかし、状況がこの計画に逆らうようになり、ついに使徒は、主がこれらの取り組みを妨げていると結論づけました。ある夢の中で、パウロはマケドニア人のような服装をした男が自分に呼びかけ、「マケドニアへ渡ってきて、私たちを助けてください」と言うのを見た。これを神の導きとして



受け入れたパウロは、直ちに旅立ち、ヨーロッパへと足を踏み入れた。（使徒言行録16:6-10）これこそが、神が御自身の教会のあらゆる事柄を御手配しておられるという、紛れもない証拠であった。

マケドニアの主要都市の一つであるフィリピは、聖書の記録において、ヨーロッパで福音が宣べ伝えられた最初の場所でした。パウロと同行者たちは、城門の外の川辺で、毎週安息日に開かれる小さな宗教的な集まりがあることを知りました。そこは祈りの集まりであり、礼拝と交わりの場でした。そこに集まっていた人々は、全員ではないにせよ、そのほとんどが女性でした。（使徒言行録16:12,13）

その女性たちの中にリディアがいました。今日の鍵となる聖句には、彼女が「神を礼拝していた」と記されています。「紫の布の商人」とは、彼女が染料製造を職業としていたことを指します。古代において染料は非常に高価であり、その製造技術は経済的な利益をもたらしました。このことから、リディアは経済的に余裕のある生活を送っていたと考えられます。パウロの福音の説教を聞いたことで、彼女の心は開かれ、理解の目が照らされただけでなく、彼女は完全に献身して福音に従うよう促されました。そして彼女は、「彼女とその家族」と共に、水による洗礼を受けてその献身を象徴しました。使徒言行録16章14、15節

福音を受け入れた後、リディアはパウロとその同行者たちを自宅に招き、滞在させることで、自分の家と財産を神の奉仕に用いました。彼女はもて

なしを負担とは見なさず、むしろ特権として捉えていました。主の僕たちを受け入れることで、彼女は神を尊び、その地における真理の働きを強めたのです。使徒言行録16:15

リディアのもてなしは、謙遜と適切な霊的礼儀を教えています。パウロとその一行は、彼女 とその家族に霊的な教えを授けていたにもかかわらず、彼女に無理に押し付けたり、支援を要求したりはしませんでした。一方、彼女は「もし私が主に忠実であるとあなたがたが認めてくださるなら、私の家にお入りください」と、心から招待を申し出ました。これは、彼女の奉仕への切実な願いと、他人に負担をかけないように配慮したパウロとその一行の慎み深い姿勢の両方を示しています。

リディアの例は、神が、はるかに大きな神の計画の中で、一人の献身的な個人を用いることができることを示しています。これは、主のために行われる誠実な奉仕は、どんなに小さなものであっても価値があるということを私たちに思い出させてくれます。備えられた心、家庭における忠実な影響力、そしてもてなしの心——これらすべてが祝福の通路となり得るのです。

## 主からの啓示

「私は天からの幻に背くことはしませんでした。」

使徒言行録 26:19

聖書が編纂されていた当時、神の民に対する神の指示や警告の多く、また神の計画や御旨の啓示の多くは、「幻」という手段によって伝えられました。これらの幻は、常にとはいえないまでも頻繁に奇跡的な性質を帯びており、それを受けた者たちの心に、与えられた情報が主からのものであることに疑いの余地を残さないほど、強烈な印象を与えるものでした。

これらの幻は、単なる好奇心を満たすために与えられたのではなく、それを受けた者たちが、自分自身のため、あるいは他者のため、あるいはその両方のために、主の計画が実現される過程において、主と協力できるよう備えられるためであった。多くの場合、聖書では幻は、民に語りかける主の「声」として言及されている。聖書をざっと目を通すだけでも、神がその御声への従順をいかに重要視しておられるか、また不従順がもたらす悲惨な結果がどれほど深刻であるかが十分に理解できるでしょう。

## 旧約聖書の幻

神はノアに、単に迫り来る大洪水について知らせるためだけでなく、彼自身と家族を救うための準備をさせるために語られた。（創世記 6:13-18；ヘブライ人への手紙 11:7）また、神はウルにいたアブラハム（ ）にも語りかけ、地のすべての氏族を祝福するというご自身の御心を告げ、自分の民を離れて、神が示す地へ行くよう指示を与えられた。主とのこの交わりから得られる祝福は、アブラハムがこれらの指示に従うかどうかにかかっていた。創世記12:1-3

神は燃える荊棘の中でモーセに御自身を現し、彼を御自分の民の偉大な救い主として任命されました。モーセに幻が与えられたその時、彼が立っていた地面さえも聖なるもの、すなわち聖別されたものとなりました。それは、神がその場所を用いて、御自分のしもべに、彼に何をしてほしいかを伝えられていたからです。（出エジプト記 3:1-10）もしモーセがそれ以降も主の絶え間ない恵みを享受しようとするなら、その幻に従う以外に選択肢はありませんでした。

預言者イザヤは、「高く、高く上げられた」主を見る幻を与えられました。（イザヤ書 6:1,8）この幻の中で、イザヤは主が「誰を遣わそうか。誰が我々のために行くか」と問う声を聞きました。預言者の答えは、「ここにいます。私を遣わしてください」というものでした。この指示こそが、主が古代に御民に与えられた幻の大部分の意味でしたが、必ずしもこれほど明確に述べられていたわけではありません。

## 新約聖書の幻

新約聖書で言及されている最も注目すべき幻は、イエスの洗礼の際、ヨハネによる福音書で与えられたものでした。ヨハネは、神の御霊がイエスに降りるのを目撃し、「天からの声が、『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者である』と言った」のを聞きました。（マタイによる福音書3:16,17；ヨハネによる福音書1:31-34）ここで、三十歳になったイエスは、地上の宣教活動を始めようとしていた。イエスは、天の父である——すなわち、「書の巻」、すなわち旧約聖書に記されていたすべてのことを成し遂げるために来られたのである。（詩編40:6-8；ヘブライ人への手紙10:5-9）主を導くために旧約聖書に記されたすべての指示は、聖霊の直接の靈感の下で記録されたものでした。その意味を解釈できる者は誰もいませんでした。イエスの完全な知性でさえ、その重要性を理解するためには、特別な啓示——すなわち幻——が与えられる必要があります、天がイエスに開かれたとき、彼はまさにこの祝福を受けたのです。

イエスは、ご自身について記されていたことを成し遂げるために来られた。その意味が明らかにされると、イエスはためらうことなく、それらを成し遂げるという任務に着手された。イエスが天からの啓示に従うために、どれほど大きな代償を払われたことか！ イエスの宣教の期間は短く、毎日が疲れ果てるような日々であった。彼は敵から罵られ、友人からは誤解され、そして「罪人たちによる激しい反対」は、ついに彼の逮捕、裁判、そ

して残酷な十字架刑へとつながった。（ヘブライ人への手紙 12:3）これこそが、その幻の意味であった。イエスは「屠られる小羊のように」導かれることになっていた。（イザヤ書 53:7）彼は「世のいのちのために」自らの肉を捧げるべきであった。（ヨハネによる福音書1:29；6:51）彼は「悲しみの男、苦しみを知る者」となるはずでした。

（イザヤ書53:3）彼は、これらすべての困難な経験において、天の父に従順でした。彼は、激しい苦しみという試練を経験しているときでさえ、従順であるとはどういうことかを学びました。ヘブライ人への手紙2:10；5:8

従順の代償を相殺するかのように、主はご自身の命を捧げている最中であっても、豊かな報いを受けられました。主が体験された平安と喜びは、主が払った犠牲を十二分に補って余りあるものでした。（ヨハネによる福音書14:27）実際、これが、主が「目の前に置かれた喜び」のために従い、「恥をものともせず、十字架に耐え抜く」ことを可能にしたのです。（ヘブル人への手紙 12:2）確かに、それは未来の喜びでした。しかし、その喜びへの期待と、約束された報いを受け取るという完全な確信が、イエスに、この世が与えることも奪うこともできない現在の平安と喜びをもたらしたのです。こうして、イエスは「悲しみの人」でありながらも、疑いなく天の父と和解していたのです。「主の喜び」が、イエスの力でした。ネヘミヤ記 8:10

## パウロの幻

タルソスのサウロは、当初、主が自分に何を望んでおられるかについて誤解していたものの、常に熱心な神の僕であった。彼が、冒頭の聖句で言及されている啓示的な幻を授かったのは、誤った方向への奉仕の任務の最中であり、後に彼は、その幻に関して「不従順ではなかった」と証言している。この幻こそが、サウロを誤った道から立ち止まらせたのである。それは、キリストと共に苦難を分かち合う者として彼が占めるべき立場と、異邦人の使徒として果たすべき使命を彼に明らかにしたのである。使徒言行録9:1-16

キリストのためのパウロの地上の奉仕に関して言えば、それがパウロにとって持つ深い意味を最も簡潔に要約しているのは、主が幻の中でアナニアに、サウロに「御名のゆえに、どれほど大きな苦難に遭うことになるか」を告げるよう命じた時の言葉であろう。（使徒言行録9:16）天からの幻への従順は、パウロにとって確かに多くの苦難を意味した。（コリントの信徒への手紙二 11:23-28; 12:7-10）しかし、パウロはこれを喜びとした。なぜなら、その幻は、偉大なメシアの大義において、主と共に苦しむ特権が彼に与えられていることを明らかにしていたからである。（コロサイの信徒への手紙 1:24）

これらの苦しみは、幻への従順——すなわち、主が彼に奇跡的に啓示されたことを他の人々に知らせるといふ従順——によってもたらされたものでした。アグリッパ王に対し、自分がその幻に背いたことはないと宣言した後、パウロはこう付け加

えた。「私はまずダマスコの人々に、次にエルサレムで、そしてユダヤ全土で、さらに異邦人に対しても、すべての人が自分の罪を悔い改め、神に立ち返り、善行によって自分が変わったことを証明しなければならないと宣べ伝えたのです。」（使徒言行録 26:20）パウロは王に、「こうした理由」によって、同胞のユダヤ人たちから告発されたのだと説明した。（使徒言行録 26:21）その結果、彼はユダヤ人と異邦人の双方から迫害を受け続け、ついにはこの世での歩みを終えるに至った。テモテへの手紙第二 4:7,8 ; 使徒言行録 20:17-25

パウロは主を絶対的に信頼し、自分の最高の霊的益にならないことは何一つ自分の人生に許されないことを知っていたため、心と魂の平安を享受していた。しかし、天からの幻に従って命を捧げなければならないという切迫した使命感からは、決して安らぎを得ることはなかった。ユダヤ人の会堂であれ、異教の神殿であれ、船上であれ、あるいは牢獄であれ、彼の人生を燃え立たせた唯一の情熱は、その天の幻の意味を他の人々に伝えることでした。彼に啓示された真理は、イエスがキリストであり、教会と世界の希望が、贖い主であるイエスに集まっているということでした。その啓示はさらに、キリストこそが、すべての敵、すなわち大敵である死さえもその足の下に置かれるまで、統治し続ける方であることを明らかにしました。テモテへの手紙第一 2:5-7 ; コリントの信徒への手紙第一 1:23 ; 15:25,26

パウロの忠実さは、キリストの福音を証しすることにとどまりませんでした。彼は兄弟たちへの奉



仕に熱心であり（ ）、彼らに「神の御計画のすべて」を宣言することをためらいませんでした。（使徒言行録 20:27）彼は信仰の忠実な擁護者であり、教会内の肉的な精神に対しては率直に反対の声を上げた。彼は、キリストこそが教会の真の頭であることを強調し、兄弟たちが「私はパウロ派だ」とか「私はアポロ派だ」と言うことは不適切であると説いた。1コリント 3:4

## 時代の終わり

パウロ、ペテロ、ヨハネによる福音書はすべて、現在の時代の終わりに、主の民が神の計画と御旨に対する理解を深めるという祝福を受けると私たちに保証しています。主ご自身の証言も同様の趣旨です。イエスは、ご自身の再臨と「第二の臨在」の様相について説明する際、次のように言われました。「稲妻（ギリシャ語：明るく輝くもの）が東から現れて西まで輝くように、人の子の到来（ギリシャ語：臨在）もそうなるであろう。」（マタイによる福音書24:27）イエスが、ご自身の臨在の日に真理の光が徐々に夜明けを迎える様子を例えるために用いた、日の出の比喻はなんと美しいことでしょう。この夜明けは徐々に進んできましたが、最終的には、主の臨在の完全かつ鮮明な輝きが、あらゆる悪、無知、迷信、そして罪の闇を追い払うことになるでしょう。最終的には、主の臨在の結果として、「主の栄光の知識」が「海を覆う水のように」全地を満たすことは確かですが、主ご自身の弟子たちは、その臨在の光によって最初に照らされる者たちです。ハバクク書 2:14

終わりの時に信仰の家族に与えられる真理について、さらに別の例えを用いて、イエスはご自身が再臨された際、「時宜にかなった糧」をもって彼らに仕えとおっしゃいました。（マタイによる福音書24:45-47；ルカによる福音書12:37）イエスと使徒たちの証言を総合すると、この時代の主の民は、聖書に記された真理についてさらなる理解という祝福を受けることを期待すべきであることが明らかになります。しかし、聖書には、神が預言者や使徒、そして主イエスの心を啓発された過去のように、この終わりの日の啓示が奇跡的な方法で与えられることを示唆する記述は一切ありません。神のすべての計画と目的は今や聖書に記録されているため、この種のさらなる啓示はもはや必要とされないのです。

私たちは、この世の終わりに、預言に示された方法によって、神の民に神の御言葉に対する特別な理解が与えられていると信じるに足る理由を持っています。私たちが明らかにしなければならないのは、この理解が、実際に神の計画であり、暗黒時代の長い数世紀の間にほとんど見失われていた啓示であるかどうかということです。それが神の御言葉の約束や預言と調和しているかどうかを検証しなければなりません。

## 神の計画

では、私たちは今この時点で、真理のメッセージを持っているのでしょうか。人間の贖いと救いに関する神の計画全体を理解するにあたっては、教義の1つや、あるいは数つの個別の点だけを検証しただけでは、真理と誤りを正しく見分けることは

できません。私たちがまず見極めなければならないのは、神の計画の中心的なテーマと、その計画のあらゆる細部が向かっている偉大な目的です。神の御言葉にある預言や約束を掘り下げていくと、何が明らかになるのでしょうか。それは、神が、この地上に王国を築き、墮落した人類が神の至高の御意志に反して起こした反逆を鎮め、人類がキリストを通して神が備えてくださったいのちを受け入れることによって、完全な状態に回復され、永遠に生きることができるようにすることを意図しておられるという事実です。

イエスは、私たちに「御国が来ますように。天におけるごとく、地においても御心が成りますように」と祈るよう教えられたとき、この偉大なテーマを要約されました。（マタイによる福音書**6:10**）イザヤ書は、この神の御旨の成就が、弱々しい肉体の力に依存するものではなく、「その（イエスの）肩に統治がのしかかる」ものであり、「万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」ことを明らかにしています。イザヤ**9:6,7**

この偉大なテーマは、神の御言葉の至る所に浸透しています。それは単に、神の御計画とは、最終的に人間を祝福するために神がなされることの骨子であることを意味しています。教会は、何世紀にもわたり、聖書のこの根本的な真理から逸脱していました。神の御国が世界を治め、祝福することを祈り待ち望む代わりに、教会と国家を結びつけることによって、人為的な王国が徐々に築き上げられました。これは「キリスト教世界」と呼ばれ、その体制の力や影響力は現在でははるかに弱

まっていますが、その基盤となった根本原則は、今もなお、神の聖なる御言葉によって啓発されていない人々の思考や行動を支配し続けています。その原則とは、人間が神に代わって神の働きを行わなければ、その働きは全く成し遂げられない、というものであるようだ。その結果、多くの人々は現在、神が諸国民を祝福するための計画をお持ちであり、人間の助けの有無にかかわらずその計画を実行されるという事実を見失っている。

## 失望——そして理解

この時代の終わりに真理が大いなる啓示を受ける以前、19世紀前半のウィリアム・ミラーら預言の研究者たちは、時代のしるしや特定の預言によって、主の再臨が目前に迫っていることを発見していました。しかし、彼らはキリストの再臨のあり方を理解できていなかったため、期待が裏切られることとなった。彼らは、キリストが手と足に釘の跡を残した人間の姿で来られると想定していたのである。彼らは、キリストが世の命のためにご自身の肉体を捧げ、人間の目には見えない栄光に満ちた神聖な存在として死からよみがえられたという事実を見落としていた。したがって、キリストが再臨される際には、預言の成就を「見張り」、注視していた者たち以外には誰にも気づかれることなく、「泥棒のように」目に見えない形で現れることになっていたのです。ヨハネの黙示録 16:15 ; マタイによる福音書 24:42,43

それからそう遠くない1800年代後半、熱心な聖書研究者たちが、相当な期間をかけて預言を研究した。その研究によって明らかになった偉大な真理

の一つは、主の再臨の目的であった。聖書は、主が地球を滅ぼすためではなく、人類を命へと回復させるために再臨されること、そして預言における「世の終わり」とは、実際には現在の邪悪な社会秩序の終焉であり、「新しい天と新しい地、神の義に満ちた世界」という新しい秩序の確立であることを示していた。（ペテロの手紙第二 3:13）使徒言行録 3:20,21において、使徒ペテロは、キリストの再臨の期間中に、キリストを通して、またキリストによって成し遂げられる神の計画について語りました。彼はそれを「万物の回復の時」と表現し、さらに、これこそが「世の初めから、神の聖なる預言者たちの口を通して」神が証しされてきたことであると付け加えています。これこそが、**我**が聞き、預言者たちを通じてペテロと私たちに明らかにした、神の声——すなわちビジョン——であった。

## 今日のビジョン

神が定められた道によって今日私たちに伝えられ、私たちが喜び祝っている真理の啓示は、すべてを包括するものです。それは、神が古代に御自分の民に与えられたすべての偉大な啓示の意味を包含しています。ノアは、私たちが今日持っているような形でこの幻を理解していなかったかもしれないし、あの世の終わりに関する彼の経験が、私たちが今生きている「人の子の時代」——この「現在の邪悪な世」の終わりに近づいている時代——を予表していたことに気づいていなかったかもしれない。（マタイによる福音書24:37-39；ガラテヤ1:4）それでも、ノアにとって、来るべき大

洪水について知らされ、それに関連して奉仕する特権を与えられたことは、祝福されたことでした。

神が、アブラハムの子孫を通して地上のすべての氏族を祝福するというご計画を告げられたとき、アブラハムはどれほど喜んだことだろう！しかし、彼は、この祝福の「子孫」が、イエスと、イエスと共に生き、共に支配するために、イエスと共に苦しみ、死ぬイエスの体の肢体たちから成る「信仰の子孫」であることを知らなかった。ガラテヤ人への手紙 **3:16,27-29**

モーセは、燃える荊棘を見て、神の声を聞いたとき、畏敬の念に打たれました。神は、彼が立っている場所は聖なる地であるから、靴を脱ぐよう命じられたのです。彼は、自分が民をエジプトから救い出し、彼らの律法を与える者となることを知りました。しかし、全人類にもたらされるより大きな救い、そして新しい契約のもとでユダヤ人と異邦人の双方が神と和解することについては、彼にはほとんど啓示が与えられていなかった。モーセが、より偉大な方が来られると預言したのは事実であるが、旧約聖書の他の預言者たちと同様、彼がこの預言や他の預言が持つ意味を非常に明確に理解していたかどうかは疑わしい。申命記

**18:15-19** ; 使徒言行録 **3:22-26** ; 使徒言行録 **7:37** ;  
ヘブライ人への手紙 **12:18-24**

イザヤ書は「高く、高く上げられた」主を目撃し、その光景に触発されて、そのような高貴で聖なる方の御心に従うよう導かれたが、彼の神に関する幻は、私たちが今日見ているような神の御性質

の栄光を完全に明らかにするものではなかった。イザヤは、私たちが特権として理解しているように、神の属性——すなわち、知恵、正義、愛、そして力——の驚くべき深みと調和を、彼が幻の中で見た「セラフィム」にこれほどの確に表されていることを、理解していなかった。イザヤ書 6:1-8

イエスに天が開かれたとき、この世での御業の目的、すなわち、イエスが人類のために苦しみ、死ぬべきであるという旧約聖書の預言の意味が、イエスに明らかにされました。当時、弟子たちにそれらの事柄を完全に説明することはできませんでした。イエスが言われたように、弟子たちは「今はそれを耐えられない」状態だったからです。（ヨハネによる福音書16:12）その後、イエスがご自身の死の意味について聖書を解き明かしてくださったとき、弟子たちはこれらの事柄をより深く理解するにつれて、胸が熱くなった。ルカによる福音書24:32

その幻の意味が、教会の「召命」を含むものへと広がったのは、ペンテコステの時であった。（使徒言行録 2:36-39）そうして、キリストの足跡をたどる者たちは、主と共に苦しみ、死ぬという特権、すなわち、この時代の「より優れた犠牲」に与ることを、より深く知るようになった。（ヘブライ人への手紙 9:23）この尊い真理もまた、暗黒時代には見失われていたが、それは今日、私たちが恵まれている栄光に満ちた幻の一部である。

パウロが従わなかったことのないその幻は、そのあらゆる含意において栄光に満ちたものでした。その中で彼は、神の計画が異邦人を包含する段階

へと進み、彼らに、王国の約束においてユダヤ人と同じ相続人となる機会が与えられていることを見出したのです。（エペソ人への手紙 2:11-22）その後、パウロには他の幻も与えられた。彼は「第三の天」へと「引き上げられ」、また「パラダイス」——「義が住む新しい天と新しい地」——へと導かれ、当時はまだ時機が熟していなかったため、語ることを許されなかった事柄を目撃した。

（コリントの信徒への手紙二 12:1-4；ペトロの手紙二 3:13）今日、私たちも信仰の目によって「第三の天」を見ることができ、パウロが「パラダイス」で何を見たのかを知ることができます。彼は、将来の回復が成し遂げられ、全人類が、地上に平和と完全な命に満ちた世界的なエデンの園で暮らすという、神の御計画を見たのです。（イザヤ書 51:3；エゼキエル書 36:33-36）パウロは自分が見たことを公言することを許されませんでした。が、私たちはそのビジョンによって、まもなく確立されるキリストの王国の祝福された知らせを全世界に伝えるよう命じられているのです！ マタイによる福音書 24:14；テモテへの手紙第二 4:2

## 真理に対する責任

すでに述べたように、古代において神が御自分のしもべたちに幻を与えられたとき、それらは奉仕のための使命でした。神が私たちに与えてくださった「真理」の幻についても同様です。私たちにはそれに関してなすべきことがあります。それは私たちにとっても奉仕の使命であると同時に、私たちの奉仕が「聖く、神に喜ばれる」ものとなる



ために満たさなければならない条件や資格を含む使命でもあります。ローマ人への手紙 12:1

私たちは、自分の手が神の奉仕に用いられることを願っています。また、自分の足が「嘆くすべての人を慰める」（イザヤ書 61:2）ために、神の愛のメッセージを運ぶのに素早く動くことを願っています。（ ）私たちは、自分の唇と舌を用いて、神の愛を語り告げたいと願っています。実際、もし私たちがその幻の正しい精神を心に深く刻み込めば、自分の持つすべてのものを神の奉仕に用いたいと願うようになるでしょう。「主よ、私は何も隠しません」——私たちは、理解の目を開いて御栄光を見させてくださった御方に、そう申し上げるでしょう。私たちは喜んで、すべてを御方に捧げます。

これらすべては、天のビジョンへの完全な従順の中に含まれています。パウロは、私たちが「あらゆる思い」をキリストへの従順へと従わせるべきだと記しています（コリントの信徒への手紙二 10:5）。これに満たないものは、主を完全に喜ばせることはできません。キリストは、私たちの光を輝かせるべきだと述べられ、さらに、その光を神に受け入れられるものとするための、義に関する多くの条件を明らかにされました。（マタイによる福音書5:16、フィリピの信徒への手紙2:15）それでは、真理の力に自らを完全に委ね、そのビジョンへの従順の中で、そこから生じるあらゆる経験に喜びを見出しましょう。時間は限られています。まだ機会があるうちに、忠実であり続けましょう。